部分となるのである。世には此の種子の原理の働きの實例として基督と其體たる教會に於て現はれたる如き美はしきものはない。此場合基督は種子の核仁で基督教會は其力場である。彼は初めより宣言して彼れの福音は世界の爲めに述べられるのであるが彼自身は唯だ猶太人にまで遣はされたのである事を云つた。彼が活動を初めた時に而して猶太人に說教をなした時に、彼を聞きし所の人々の間に一種の靈的革命が起り、而して新らしき生命ある一社會が勃興し、其根を古き猶太民族に發しつゝ其枝葉は益々天に向つて昇り行くのであつた。これ即ち其中に神の生命を有する所の心靈的同胞觀である。

基督は即ち其生命であり核仁である、而して彼は彼自身の生命の中から救の種子を其救ふべき人類の凡てにまで與へた。此種子を受けたる人類は人を活かす神の力によつて自らの罪深き心を變へ、之を基督の靈體即ち地上に於ける天國の一部分となさしめ得るのである。やがて新しき社會が其周圍に形造られ、此靈的生命の種子に倚り賴む者は新しき生命を受け、其他の者は恰も種子の外殼が成長する植物から脫げ落つる

如く排斥せられた。例へば基督に反對せる敵意ある猶太國民は、其幾多の長所あるに拘らず生命の種子より離れ去りしが故に、今や世界に於ける憐れむべき放浪者として殘つてをる。彼等は地上に於ける他の人民と共に吾人の同情と救助とを受くる値打あるものである。是等の事あるに拘らず、天國の成長は決して留まらなかつた。成長の法則に適つて、種子の一部分が其活力を失うた時に新しき生命を有する新しき機關が生じて來て、其周圍の更に遠き所に力を及ぼし、次第に此全世界即ち凡ての人類は此生命の働くべき力場となり潛勢力となつたのである。基督は其使徒を異邦人に送り地の果てにまで遣した。而して天國は全世界に其根を下ろし、今や活ける最大の同胞團體にまで迅速に成長しつゝある。

天國の成長は心理學的並びに心靈的働きである。此働きの性質は一個人が彼れの精神的並びに肉體的存在の統一に於いて示す所のものによつて最も能く說明される事が出來る。心理學上より云へば單に心のみが考察せらるゝ時に、それは主體であつて肉體は其客體である。此心と肉とは相互に働き合ひ而して二つの部分は一個人を組織し

てをる。基督と其神秘なる靈體即ち教會も亦恰も是と相似たる關係を有してをる。即ち基督彼自身は主體であり其周圍の信者は之を總括して之を客體と云ふべきである。斯くて活ける信者は眞に基督の一部分である。恩寵豐かなる救世主の生命はイエス、キリストより流れ彼れの體たる教會にまで及んだ。而して彼等信者の禮拜と勤行の芳香を以て彼にまで戻り行くのである。のみならず、一個人が先づ自らを顧みる時に主體として之を見、彼れの衣服や財産や親戚や家族やを見る時に『是れ我が物なり』と云ふのである。實に是等のものは彼れの物である。彼は自らより離れたるものとして之を考へず、寧ろ彼自身の一部分として之を考へる。約言すれば是等は彼れの客體『我』である。彼と其客體たる物とは相互に相働くのである。彼が我物と呼ぶ所のものは彼より離るべからざるものである。彼等は彼れの生命の一部分即ち彼自身の一部である。斯くの如く基督も其教會に對して主體であり、人類は其客體である。基督が人類を呼んで『是れ我が物なり』と云ひ得る種々なる意味が存する。人類は彼れの肉體の關係上自身の一部分である。又彼が凡ての人類の爲に獻げた犧牲の故を以て人類は即

ち彼れの物である。即ち無限の愛の結合力によつて彼自身の物となし給ふのである。彼れの靈魂は親が子を思ふ愛の惱みを以て此世にまで注ぎ出されてをる。彼は世の人を呼んで是れ我が兄弟なりと云つた。言ひ換へれば人類は彼れの客體『我』である。彼は決して人類より離るゝ事は出來ぬ、即ち彼と人類とは一個の心靈的二重原則即ち心靈力の循環作用を形造つてをるのである。彼は地上に於ける彼れの生活に於て、カルバリー山上の十字架に於て、萬民を救ふべき福音に於て、彼れが遺し給ふ宣教者に於て、而して彼自身と人の靈魂との活ける結合力たる聖靈に於て、世界の人類にまで出懸けて行くのである。是等の種々なる恩寵の手段は神の犧牲的なる慈愛に富める活ける生命ある力が未だ救はれざる世界にまで働きかける所の特種なる方面である。

他の一方に於て世界は此の入り來る所の力を感ずる。而して前に述べし如く或は之に引き着けられ或は之より反撥されるのである。此結果は全く心靈の力を受ける所の人心の態度によるものである。感謝すべき事には多くの心は今や主にまで向ひつゝある。出で來る所の召命に對して世界の人々は『我れ起ちて我が父に往かん』と云つて

をる。彼等の向上心と希望と愛と信仰と奉仕と祈禱とによつて彼等の全身全靈は喜しく神にまで應答しつゝある。此の心靈的エネルギーの循環作用は常に活ける源たる基督から其流れを供給されねばならぬ。斯くて人の心と生命とは恰も血液の循環が肉體の生活に必要なる如く此循環作用によつて純潔にせられ美しくせらるゝのである。

此基督敎の科學的說明に於て、世界同胞主義とは果して何であらうか、及び如何にしてそれが實現されるかの問題が解明されてある。又基督敎と他の異宗敎との區別も之によつて明らかにされる。人類救濟の大目的を達する爲め多くの豫言者や聖人や宗敎的敎師が起つた、併しながら其中の何人もイエス、キリストと比ぶべくもない。神は世界人類を放任の中に置き給はなかつた。寧ろ人類を向上せしめる爲めに神は宇宙的法則の經綸に從ひ適當なる時に於て心靈的の潛勢力を有する此世界を再生せしむる所の一個の救濟的核仁を與へ給ふた。基督は世界の力場の中心に於ける生命の核仁である、全世界は基督にまで育て上げられねばならぬ。何人と雖も苟くも彼と活ける關係を結べる者は、此偉大なる社會的基督的同胞團體の一員となり、而して世界の續く限

り、團體は其數と勢力に於て增し加はり行くのである。

第二十一章　天地創造の聖書的年紀

物質世界の研究に於て吾人は自然界を通して心靈にまで說き及ぼし、而して更に進んで三一の神の存在及び其力に說き及んだ。而して神の天啓たる聖書に於て一神の中に存する同樣なる三人格の存在と力とに就いて學んだ。此物理的宇宙に働く神は種々なる創造の經過に於て常により低き所からより高き所に進み行くことが自然界の法則として明らかである。而して物理的創造の循環は人間に於て其絕頂に達した。多分進化論の最も熱心なる信者も地球上に於て人よりもより高き發達を豫想してをらぬであらう。何となれば人間の智的並びに心靈的發達の現象は物理的進化の此上の繼續の觀念を成立せしめぬが故である。斯くの如くにして天地創造の大循環の中央に於て物理的創造の進步は絕頂に達した。物理的進化が留まると共に心理的並びに心靈的進化が代りに起つて來た。それ故に此心靈的循環は連續せる進步によつて益々其向上を續け、遂に全創造的年紀が完成されるであらう。

吾人が凡ての體系に於て存する事を見た所の二重性即ち如何なる體系にも核仁と其力場があると云ふ事は、此世に動的並びに靜的勢力の平均があり、從つて是等の二つの力が各體系に於ける循環作用を生ずる事を示してをる。吾人は又動的並びに潛勢的勢力は啻に等分であるのみならず彼等は相互に正反對に働いてをる事を觀察する事が出來る。而して凡ての物理的循環に於ては動的勢力が終り潛勢力が始まる所の極點に近く、其處に新しき創造が發生する所の一點がある。

さて宇宙に於ては物質的と心靈的との二界が存する以上、如何なる創造の循環でも其中に此二個の要素が存せねばならぬ筈である。而して創造的エネルギーの大循環作用に於て物質界が最初の一半をなし、而かも其一半は常に凡ての體系の動的半面を代表するものであるが故に、心靈は其第二の一半を形造り、エネルギーの第一本源即ち核仁に對して、潛勢的一半の働きをなすものである。創造のエネルギーは神より發生して、次第に複雜なる而して次第に多樣なる物質上の變化をなしつゝ進行し、遂に人間の物質的構造に於て其極點に達し、而して此處に人間の最高の肉體組織に於て、大

循環作用は一個の心靈的エネルギーとして神の方に戻り行く。此神にまで戻り行く心靈のエネルギーは其運動の方向に於ても其性質に於ても全く肉體的人間に正反對の働きを現はす所のものである。

循環作用を支配する所の法則に從へば、恰度物質の進歩が終り心靈の進歩が初まる所の極端に於て一個の新しき創造が起らねばならぬ所の一點がある筈である。此新しき創造は物質界よりはより高き世界に屬するものであり、其性質に於ては全く心靈的であり、而して宇宙の創造循環に於て一個の進歩的連鎖を形造る所のものである。

若しも聖書が神より人に與へられたる眞の天啓であるならば、其處にも亦創造の全循環作用即ち順序が示現されてあらねばならぬ筈である。即ち最初の一半は物質的であり後の一半は心靈的であらねばならぬ。而して又此聖書的創造原理は神が自然界に於て吾人に示す所の物質界の原理と全く符合せねばならぬ。

偖聖書に立戻つて全卷を通讀する時に、其處に人間の考へ得る最も驚くべき種類の一循環が現示されてある事を見る。それは神が自然界に於て敎へ給ふた所のものゝ正

確なる模寫であると云ふべきである。創造の宇宙的循環の原理が此聖書の中に明示されてをる事を發見せる吾人は、如何なる言語の力も言ひ表はす事が出來ぬ程の敬虔讃歎の念を神の力と其榮光と愛とに向つて抱かざるを得ぬ。此大創造の物質的半面は創世記第一章に於て見出される。そは神が地球及び其中に存する凡ての生物を造り給ふたと云ふ六日即ち六時期の記事を含蓄してをる。次に宇宙創造の心靈的半面は創世記の第二章に於ける人間の創造より始まり默示錄の終りにまで續いてをる。此第二の半分は人間の道德的並びに心靈的發達を含蓄し、其發達によつて一個の新しき靈體となるのであるが、此一半も亦心靈的存在の種々なる狀態を表はす所の六時期にまで區別されてある。

聖書の第一書たる創世記の最初の一節に『元始に神天地を創造り給へり』とある。而して第二節は『地は定形なく曠空して』云々を以て初つてをる。最初の一節は、一文章中に諸々の天と或る程度の發達を遂げた地球とを含有する所の創造の全事業を言明するものである。聖書の記者は其後諸々の天の創造に關して更に云ふ所がない。

唯だ專ら神が此地上に於てなし給へる所のものにまで其記事を限つてをる。而して地質學的事實と聖書の記事との比較は、兩者の間に驚くべき類似點が存することを表はしてをる。

(一)聖書に『地は定形なく曠空して黑暗其面にあり』とある。然る後に神の靈が働き初め暗黑を分散し混沌の中より秩序を齎した。科學は地球が一度は溶解せる球であつた事、冷却がある程度まで進んだ時に瓦斯體と固形體との分離が起つて、地球の表面は濃密なる蒸氣の中に包まれ爲めに全き暗黑を生じた事を吾人に告げる。此點に於て科學は聖書と同一なる事を敎へるのである。

(二)聖書の記者は初めに何等の大空もなく全地は濃密なる蒸氣即ち霧に於て包まれてゐた事、其一部分は無論空氣で他の部分は水蒸氣で而して他の部分は他の物體で成立つてゐた事と、而して神が是等の蒸發氣を分けて一部を地の上に落下せしめ一部を天上の雲として昻上せしめ、斯くて大空が地球の上に出來た事を告げてをる。科學は地球が次第に冷くなつて僅かの熱を發散する樣になつた時大氣が次第に晴れ渡つて來て、

其濃密なる部分が地球の上に落ちて來た事を告げる。茲にも亦科學は聖書の物語を說明する。吾人は地球が充分に發達した今日ですら低氣壓の時に大空は全く隱れて全地が暗黑の海の中に包まれてしまふ事を見たであらう。

(三)創世記の著者は大氣の中に含まれたる水の或分量が地上に落下した時に土地の全面がそれによつて浸された事を告げる。其時神は諸處に於ける土地を生ぜしめ地上の水を海にまで集めた事を記してをる。而して其後神は地をして草や野菜や樹木等を生ぜしめ各々其類に從つて果を結び種子を持たしめた事を記してをる。

斯く神が創造の第三日に於て植物を地上に生ぜしめたと云ふ聖書の記事は驚くべき度に於て科學と符合するものである。地質學は啻に地球が或時代に於て全く水を以て蔽はれ、而して連續せる變化によつて乾ける土地が表はれた事を告ぐるのみならず、又それは植物が最下等の動物の創造さるゝ前に發生してゐた事を主張する。加奈陀及び合衆國に於て深き海底植物の化石が如何なる動物の化石の現はるゝ前にローレンシャン岩即ち片麻岩中に發見された。

如何なる種類の動物も植物の存在の前に存在した事を疑ふべき強き理由がある。ダイヤー教授は次の一節に於て此問題にまで多大の光を投じた。

『動物界から植物界を分ける所の根本的相違は兩者の間に存する營養攝取の方法に於て見出される。若しも吾人が其最も單純なる狀態にまで植物と動物とを引下げて之を比較するならば、即ち何れも單一細胞より成立つてをるが如き場合に於て、其單一細胞の動物は細胞の壁に變形を生ずる事によつて固形體の滋食物を取入れ、且つ此固形食物を液體に變化する力を有してをる。而して單に滋養攝取の方法に於て斯かる相違があるのみならず、滋養物其物の材料に於ても又甚だ重要なる相違がある。現在の地上の狀態に於ては其等の物體即ち化合物は動物の滋養分として要求されてあるのであるが、吾人の知る限りに於て如何なる處に於ても自然に生じて來るものでない、言ひ換へれば動物的組織の影響から離れて生ぜらるゝものでない。詳しく云へば單に無機物界からのみ取られた材料は殆ど凡ての植物を直接に養ふに足るのであつて、從つて間接に凡ての他の生命をも養ふ事になるのである。斯くて

無機物は植物を養ひ、植物は人間を養つてるをのである。大體から云へば植物は滋養の目的に向つて炭酸（CO^2）水（H^2O）及びアンモニア（NH^3）等の如き二素化合物を用うるに方り、動物は凡て是等の同一なる元素を要求してをるに相違ないが、唯だ二元素化合物よりも遙かに高き化學的集合體から成立つてをるの差があるのである。故に植物は凡ての他の生物の爲めに謂ゆる薪水の勞を取る所のものである。故に動物は植物以前に直接に無機物からのみ其滋養を取る事は出來ぬ。動物が植物の後に造られた事は之によつても明らかである』。（大英百科全書第三卷六九〇頁）

（四）第十四節以下に於て聖書には、其處に未だ何等の太陽も月も星もなかつたが、神は其遲き日に於て世界の發達の爲めに之を造り、而して地上に光を投ずる爲めに諸々の天に掲げられたと記されてある。懷疑者は此第四時期に於て起りし所のものゝ記錄を嘲笑した。併しながら彼等は創世記の記者が凡て此地上に於て起つた所のもの又は神が爲し給へる所のものを記しつゝあるのであつて、先にも云へる如く第一節に於て天地の創造を明言した後には最早何處にても天上界に於て起りつゝある所のものを繰

り返す必要はないのである。即ち諸々の天は既に造られてあつたは無論であるが、それが或る時期までは地球に取つて有るも無きも同然である。其故に數千年前に於て地球が濕氣ある大氣に包まれ空中に低く垂るゝ所の雲が横り、爲めに天上の太陽が其光を遮られてしまつたので、此霧が晴れて初めて地球が太陽の光を見たのであるから、太陽が地球よりも後に造られたとの記事は必ずしも虚僞ではない。此場合に於ても亦聖書の記事は科學と符合する。

(五)偖聖書の記者は、神が生物の夥しき數を造つた、即ち先づ海に於て次に空氣に於てあらゆる魚類と海中動物と而して禽類とを創造した事を語つてをる。地質學は魚類と兩棲類と爬蟲類と鳥類とは茲に記載した順序に出來た事を告げる。茲にも又地質學と聖書との間に何等の矛盾がない。

(六)第六時期に於て神は地をして家畜を産ましめ地に這ふもの或は運動するもの及び地球の諸動物を造つたと記されてある。地質學は進化の順序上此時代に於て哺乳動物が生れ出た事を告げる。而して種の進化の絶頂に於て人間が現はれ、其時期は地質學

の謂ゆる第三紀後代即ち歐羅巴に於ける氷河時代の終りの方であつたのである。聖書は神が地球の家畜と野獸とを造つた後『神其像(かたち)の如くに人を創(つく)造り給へり即ち神の像の如くに之を創造り之を男と女とに創造り給へり』と記してをる。

神は六日の間即ち六つの長き時期の間働いて物質世界の創造を完了し給ふた。そこで神は其なしつゝありし勞役から休んで、其造りし所のものを善しと見給ふた。安息日の後神は天地創造の圖圖を告ぐる爲めに而して人間の靈性の發達を成就する爲めに再び其仕事を初め給ふた。斯くて神は創世記の二章の四節に於てエホバの神として吾人にまで紹介せられてをる。此名は一般的に造物主として呼ばれてをるに反して神が或る特種なる關係を人間に對して有し給ふ事を示してをる。聖書の記者は物質的世界の創造の事實を極めて簡單に述べた後、人間の心靈界の創造に於ける同じく六時期に亘る神の事業を以下の順序に於て記述してをる。

(一)樂園の保有。地球の岩石の構造に於て吾人は屢々一時代の地層が他の時代の地層と相重り合ひ爲めに其何れの時代に屬するかを正確に區別する事が困難である場合が

ある。其如く吾人は聖書の記事に於ても物質界から精神界の創造に移る時に孰れが物質的並びに歴史的であり、何れが心靈的並びに表象的であるかを決定する事が頗る困難である。故に靈的創造の第一日に於て吾人は一面に物質的並びに歴史的の要素を認め、同時に心靈的並びに表象的要素を認めるのである。一見すればエデンの園の記事は歴史的事實であるかの如く思はれるが、併しそれに附着する重なる意味は必しも其處に一樂園があつたと云ふ事ではない。之は『生ける靈』として造つた所の人間に對するエホバの神の愛護と給養の事實を描いたものである。即ち人間が神の愛護を認め之を感謝し得る點にまで發達した靈性の進歩を記述したのである。

人間が野の獸や空の鳥に對して各々其名を與へたと云ふ記事には更に一段の心の進歩が認められる。若しもエデンの園の記事が一個の歴史的事實であつたとすれば、それは單に第六日目に達せられた所の物質界創造の事實の繰返しに過ぎぬ。既に六日目には人間の男女が造られてあつたのであるから改めてエデンの園に於て之を說く必要がない。然るに是等の事實が靈的創造の第一日に繰越されてをる理由は、そが其時代に

於ける人間の靈的發達と離るべからざる關係を有するからである。

されば創世記第二章に『エホバ神、土を以て野の諸の獸と天空の諸ての鳥を造り給へり』云々とあるのは、エバの創造と對照して特別なる意味がある樣に思はれる。アダムはエホバの導きにより自らの助け手を探し求めてをつた。エホバは此要求を滿さんと欲し給ふたが、其前に人間を敎育して自己の心情の滿足を與へられたる時に其恩寵に對して之を感謝する事の出來る程度にまで其勢力と經驗とを增さしめんとせられたのである。其意味を表す爲に聖書の記者は、エホバが土を以て禽獸を造りしに拘らずエバを造るに方つて『アダムを熟く（ふか）睡らしめ睡りし時肋骨（あばらほね）の一つを取り……取りたる肋骨を以て女を造り之をアダムの所に携（つ）れ來り給へり』と特筆してをる。茲に土より造られたる獸と男より造られたる女とが相對照されてそが如何に最初の人間に映じ又將來の人類に映ずるかゞ示されてある。此處には神が何時獸類を造つたかを說かず、そは既に第一章に於て說かれてある。然るに何故に再び此處に獸類の事が記されてあるかと云へば、アダムの覺醒せる理性に取つて獸が土より造られたに反しエバ

がアダム自身の體から造られたと云ふことが、甚だ大切なる心理上の經驗を云ひ表すものであるからである。女が男の血肉から出でたと云ふ事を知るのは、男女の神聖なる關係を認識する爲めに甚だ必要である。腐敗せる男子は婦人が自らの如き同じ人性と神性とを具備するものである事を悟らぬものである。彼女は恰も靈魂なきもの丶如く取扱はれ野の獸よりも甚しく男子によつて墮落せしめられた。時として妻は家畜よりも閑却され蔑視されてをる。之に反して墮落せる人間が自己と獸類との間の區別を充分に認識しなかつた證據は、諸の神話や古代の宗教に於て獸や魚や人間が雜然として常に相共棲してをる有樣によつても知る事が出來る。

人間が活ける靈であつた所の此最初の時期に於て、彼は二個の重要なる教訓を與へた。即ち彼自身とエホバ神との間に存せねばならぬ關係、並びに自己と其妻との間に存すべき關係との二點である。

樂園の重要なる設備の一つは殆ど全く人間の心靈の性質に關してをるものである。即ちそれは生命の樹と善惡を知るの樹とを樂園の中央に置いたことである。或聖書註

解者は生命の樹は特種なる治療の性質を有する樹であつて、善惡を知るの樹は有毒なる樹の一種であるなど丶想像してをるが、何人も其樣な事を知る事は出來ぬ。實際如何なる種類の樹であつたかは問ふ所でなく、唯アダム、エバの其造主に對する靈的並びに精神的態度の性質如何と云ふ事が問題である。彼等は神を信じ之に從ふであらうか或は之を信ぜず又從はぬであらうか。吾人は既に人間の靈的生命の性質其物に於て、神を信じ且つ之に從はねばならぬ所の可能性が存する事を示した。故に造物主たる神が其造れる人間に就て知らねばならぬ最も重要なる問題は、彼が果して惡を避け善を選ぶであらうかと云ふ事である。此人間の生死の別る丶所の大問題、而かも彼が全く自らの爲に決定せねばならぬ所の此問題は、神に對する彼れの道德的忠順如何と云ふ一事である。故に樂園の中に一つは生と一つは死の目に見ゆる表象を置く事は、人間の靈的人格の力を强めるに必要なる教育的手段であつた。畧言すれば二本の樹は人間の性質の二重の原理の表號である。人は神の像に於て造られたものであるが、併し彼は經驗なく從つて道德的に一個の嬰兒であるに過ぎなかつた。神は人間が次第に成長

し一歩一歩向上進歩せん事を望み給ふのである。

(二)失樂園と神の約束。アダムとエバは樂園に於て凡ての善き賜によつて圍繞されてあつた。彼等は常にエホバと交り、エホバは自ら又は其代表者によつて常に彼等と通交し給ふた。彼等は飽くまで彼に信頼すべきあらゆる理由を有してをり、且つ彼等の前には神に對する不從順の結果として來る厭ふべき運命に關する嚴かな警戒が常に掲げられてあつた。然るに悲しいかな一たび誘はるゝや彼等は其心中に不從順の思想を起しエホバの神より背き去る性質を造るに至つた。

『斯くの如くにして封印は破られた、心の忠直が失はれた、罪惡が發生した、而して外形の行爲は此悲慘なる經過を確かむる者たるに過ぎなかつた。智慧足らず用心足らず心の力弱きエバは先づ誘惑の犧牲となつた。即ち聖書に「アダムは惑はされざりしが婦は惑はされて罪に陷れり』(提摩太前書二〇一四)と記してある。アダムは知りつゝ罪を犯し自ら滅亡に陷つた。此罪は悲しむべく重大のものであつた。そは宇宙の主たる神の意に從ふよりは些細なる慾情の滿足を善しとしたのである。そは神の智慧と聖潔と善

良と正義とを無視したのである。そは極端なる忘恩の印しである。而して全く結果の如何を顧みず、神の道德的支配を無視し、而して己が子孫に關して飽くまで殘酷で且つ利己的であつたのである』

『彼等の上に發せられたる死の宣告は彼等が神に出會ひし前に其結果が現はれた。彼等の目は己が罪の恐ろしさを見るべく開け而して己が恥ずべき狀態を見た。彼等は恐れて其身を隱した。心靈的の死は既に彼等を捕へ肉體の死はやがて彼等に臨んだ。彼等は自らを安全に其造主に繫いだ所の錨の綱を截ち切つた、而して神より離れ絶望の海に漂ふた。

併しながらエホバの神は恩寵の神である。假令彼等が罪を犯しても初は之を憫み如何に獸の皮を以て自らを被ふべきかを敎へた。恐らく獸は神にまで犧牲として献げられたものであらう。加之エホバはアダム、エバの苦しめる良心に迄一道の希望と光明とを送り給ふた。即ち彼等を誘へる蛇を詛うて『又我れ汝と婦の間及び汝の苗裔と婦の苗裔の間に怨恨を置かん彼は汝の頭を碎き汝は彼の踵を碎かん』(創世紀三〇十五)と云

ひ給ふた。之は基督信者たる註解者によつて最初の福音の約束であると考へられてある。此語の中にやがて此世に來りて惡魔の力を毀ち墮落せる人類を救ひ給ふ所の救主の預言が含まれてをる。それのみならず此約束の中に暗示されたる基督によれる救は、人類が其墮落によつて失つた所のものを恢復し得て餘りあるものである。此救は人間の原始的狀態に於て想像も附かぬ程なる恩寵と光榮とにまで人類を向上せしめた。斯くて精神界の創造の他の時期に於けるが如く、此處にも亦假令人の側に墮落が起つても神の側には絶えず完全の域に達する所の進歩が繼續された事を示してをる。

(三)アブラハムの契約。　失樂園の時期の特徴たる死の支配は約五千年間繼續したが、神は此精神界暗黑の時代に於ても彼に仕へた所の特撰の種子を有し給ふた。聖書に據れば是等の種子たる人物はアベル、セス、エノク及びノアである。併しながら時滿つるに至つて惡魔の表象たる蛇を征服する事に關して、アダムとエバになし給へる約束を果す爲めにエホバの神はアブラハムによつて一個の契約を立て給ふた。此契約は約二千年間續いて基督の時にまで及んだ。そは心靈界の創造に於ける第三日を形造る所

のものである。此時期の間にある幾多の新紀元を劃せる所の特殊なる廻旋が心靈的エネルギーの世界に演ぜられた。是等の新紀元はヘブライ民族をして一歩は一歩より高く靈的向上を遂げしめたものであるが、其一つは律法の制定者たるモーセによつてなされたのである。エホバの命令によつてモーセは埃及に捕へられたるヘブライ人を其本國に導き出したのみならず、又彼は十誡に含まれたる道德的律法を制定し、禮拜の規則たる儀式を制定し、且つ行政の法規たる民法を制定した。是等の諸律法の主義精神は爾來世界の凡ての開明國民の道德律や宗教々義や民法やに適用せられつゝあるのである。

ダビデ王の治下に於ける王國の建設は心靈的偉大と現世的權威に於ける他の一新時期を劃する。眇たる一小牧童たるダビデは彼のイスラエルの軍と活ける神とを輕んぜるピリステ人の巨人ゴリアテを一擊の下に斃したのであるが、彼はエホバを信ずるの信仰に於て强くなり又其助けによつて勝利を博したのである。彼は信仰の表象である。彼は遂に王位に昇り一大國王となつた。彼は其王國が永久に存續する事の約束を

受けた。彼は又イスラエルの大詩人となり其詩篇は世の終りまで凡ての基督教國民によつて謳はれるであらう。

其他の大事件が國民の歴史中に起り從つて多くの大預言者も起つたが、併しながら此國民の最大人物にして世界に於ける空前絶後の大人格はイエス、キリストである。彼はダビデ王の現世的王國の終りに生れたのである。神の契約に於ける主要なる目的は救主をして此世に來らしむべき一國民を養成する事であつた。アブラハムはエホバを拜した者であり、其子孫はモーセ其他の預言者によつて與へられたる儀式と禮拜に於て、常に救世主の來臨を待望する事を敎へられてをつた。神がアブラハムとなし給へる契約の序文は次の如である『爰にエホバ、アブラハムに言ひけるは汝の國を出で汝の親屬に別れ汝の父の家を離れて我が汝に示さん其地に至れ。我れ汝を大なる國民となし汝を祝み汝の名を大ならしめん汝は祉福の基となるべし。我は汝を祝する者を祝し汝を詛ふものを詛はん天下の諸の宗族汝によりて祉福を獲んと』。(創世記十二〇一—三)アブラハムになされたる祝福の約束は其子イサクにも其孫ヤコブにも且つ其凡ての子

孫にまでも與へられた。

最大律法者たるモーセは同時にアブラハムの子孫の指導者であるが其將に死なんとする時に國民に向つて豫言をなして『汝の神エホバは汝の中汝の兄弟の中より我れの如き一個の豫言者を汝のために興したまはん汝等之に聽くことをすべし』と云つた。(申命記十八〇十五)

モーセの後數百年にしてエホバは他の豫言者の口を借りて左の如く云つた『わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが選人を見よ我れわが靈をかれに與へたり、かれ異邦人に道を示すべし。かれは叫ぶことなく聲をあぐることなく其聲を街頭にきこえしめず。また傷める蘆を折る事なく、ほの暗き燈火を消す事なく眞理をもて道を示さん。彼は衰へず喪膽せずして道を地に立てをはらん、もろ〳〵の島は法言を待ち望むべし。(以賽亞書四十二〇一—四)

聖書の中には救世主の降臨及び其性質に關係ある諸點を豫告する所の一百以上の豫言が記載されてある。其中の最も新しき豫言は救主の誕生前略ぼ三百年前に發せられ

た。併しながら年月が經つに及んで愈々救主が來るべき時期が近づいた。是にて天使ガブリエルは處女マリアに現れて左の如く云つた『聖靈爾に臨る至上者の大能爾を庇はん此故に爾が生む所の聖なる者は神の子と稱へらるべし』(路加傳一〇三五)。聖書は斯く敎へ基督敎會は基督が人間の父なしに聖靈によつて生れたことを主張してをる。而して吾人は基督の生涯と死と復活と昇天とは充分に斯くの如き結論の正確なるを證據立つると信ずるのである。

吾人は必ずしもイエスの誕生に關する此主張を理論的に證明せんと企つる者でない。併しながら自然界の創造の立場から之に就いて精密なる研究を試みて見やう。本書の中に自然界の創造は凡て無機物から植物に進み、植物より動物に進み而して終に動物より靈性にまで進み、而かも是等の創造の連續に於ける各階級は凡て低きより高きに向つて進むのであるが、此進歩の成立する所以は必ずや直接間接に天地の造物主から力が入り來る事によつて出來るのである事が屢々證明せられたのである。吾人は又凡ての自然界の體系に於て第三個性即ち發生的領分が恰度動的並びに潛勢的勢力の中

間にある高壓點の處に存在する事を認めた。尙又宇宙的創造の順序に於て自然界の創造は人類に於て其絶頂に達し、而して全循環の靈的部分は物質的部分と正反對に此處から初つて來るものである事が示された。斯くて創造の宇宙的法則に從へば最早人間の物質的性質の發達なるものはなく、唯だ靈的性質のみが發達し行くのである。此靈性の發達は主として非常に高尙なる靈的人格を有する所の肉體の人より成る新創造の結果であらねばならぬ。而して此新しき靈的人間は新創造の進化の法則に從ひ、物質的並びに心靈的創造が其心靈的發達を完成せしめる所の人から生ぜねばならぬ。又物質界が既に進歩的創造の絶頂に達したが故に斯かる新人の肉體的血統は其傳達を中止せねばならぬ。從つて將に成らんとする靈的存在者即ちメシヤたる救世主は肉體の人以上の者なる故に飽くまで靈的の人であらねばならぬ。言ひ換へれば斯かる人の父は靈なる神であらねばならぬ。此靈性の萠芽たる人格は聖靈の力によつて此世に來りしものであつて、即ち三位一體の第二人格に外ならぬのである。彼は父の懷にありし者なるが自らを空しうして地上に下り來り肉體を取つて新しき物心兩界の創造力となつ

たのである。彼は新しき靈的人類の第一人であつて、彼れの如く新に生るゝ所の凡ての人類の長兄である。それ故に基督の誕生に關して多くの人が不自然にして信用すべからずと考へた所の事は毫も不自然ではなく、唯だそれは超自然即ち吾人が自然界に見る所のものよりは一段高き法則の働きであるのである。

第四、新しき契約。神がアブラハムによつて與へた契約と云ふのは、人類の中から凡ての人間よりも大なる靈能を發揮した心靈的の一大人格が生れて來て、新しき心靈的創造の天地に於て人類の代表者となり、以て創造的循環の圓周を完成するであらうと云ふの約束であつた。此人類の代表者たる救世主は心靈的創造の順序に於て第三日の終りに起つたのであるから、第四日目即ち新契約の時代は人間が其の墮落によつて失ふた所のものを回復し、心靈的王國の第一人たるキリストによつて人の子が新生を得るに至るべきことを意味してをるのである。

神の國は心靈的の王國であつて、靈的存在者にあらざれば何人も之に住むことは出來ぬ。キリストはニコデモに向つて人若し聖靈によりて新たに生れなければ神の國を

見ることが出來ないことを敎へられた。此法律學者たるニコデモに語られたキリストの一言中に、吾人は物質界に行はれてをる低き生活より次第に高き生活に進歩して行く所の謂ゆる進化の法則が、全宇宙の大循環に於て矢張り心靈界にも働いてをることを見出すのである。從つて人間が神の國に入るべき唯一の希望は只だ心靈的の再生によるのみであることが分かる。

誕生は吾人の知る限りに於て決して偶然に來るものでなく、又單に發達によつてのみ來るものでもない。誕生は唯だ親子の關係から生ずる、嚴格に言へば二人の親の間から出來るものである。而してキリストが此の靈によりて生るべき事を語り給ふ時に、そは吾人が自己の中に一種の靈的誕生を經驗せねばならぬ事と、此靈的誕生は聖靈を父として神より生れるのであることを意味してをるのである。

偖てキリストは此新しき心靈的人類界の第一人即ち長子であり、而して其意味に於て吾人々類の長兄であると共に、更に眞實なる意味に於て彼は吾人の心靈的祖先である。吾人は靈によつて生れるのである、而して此靈は聖書に神の靈として記されてあ

るけれども、ペテロやパウロは此靈を呼んでキリストの靈と云つてをる。キリスト彼れ自身も亦聖靈によつて吾人の中に內住し給ふことを告げられた。故に聖靈がキリストの犧牲によつて吾人に與へられ、其靈は即ちキリスト自分の靈である以上、吾人はキリストを仰いで吾人の靈的生命が依つて以て來る所の親であると認めるのが當然である。實に靈的生命はキリストを通ふして神より來るのである。

キリストが十字架につき給ふ前夜その弟子達と最後の晩餐をなし給ふた時、彼は此の新契約は彼れ自身の血を流すことによつて初めて成就せらるゝことを敎へ給ふた。吾人の罪を贖ふ爲めのキリストの死に就いては到底吾人の了解し能はぬ程の深き神的秘義がその中に含まれてをるが、要するに一種身代りの意味に於ける犧牲であつたことを知るのである。若しも單に不從順の罪を犯し之を悔ひたる子に對して父の赦しを要求する丈けの事であるならば、吾人は何故にキリストが十字架上になし給ふた如き犧牲の死は必要であるかを見ることが出來ぬ。然るに人の罪は單に赦しを必要とする以上の重大なる影響を有する所のものである。單に不從順の行爲によつて其生命を失

つてしまつた所の子供の罪は、慈愛深き親によつて幾度でも赦されるであらう。併し此の赦しは既に失つてしまつた生命を回復する力を有しない。天父と失はれたる人類との關係も亦た此通りであつた。人間の罪はエホバの神が宣告をなし給ふ前に已に死の結果を生んでをる、即ち聖書に罪の償ひは死なりと書いてある。死は罪の結果として必然的に人間の上に臨んだのである。故に人間の救ひに關して吾人の考ふべき第一の問題は『愛の父なる神は吾人に生命を回復する爲めに如何なる手段を講じ給ふであらうか』と云ふ一事である。第一の問題は生命を回復するの方法如何であつて、それから罪の赦しの方法如何が第二の問題として起つて來るのである。

偖て吾人をして先づ如何にして生命が來るものであるかを考へしめよ。自然界を通じて生命は唯だ生命から來る。若しも之れが自然界に於ける法則であるならば、吾人は心靈界に於ても亦生命は唯だ生命から來ることを肯定してもよいではないか。何人も斯かる推定に對して反對する者はなからうと考へる。尙又人間は物質と心靈との二重性を有してをる。然るに人の罪は其の全存在の上に死を來らしめ、從つて吾人の將

來の發達及び向上に對する神の經綸を阻害することになつたのである。故に吾人の爲めに計り給ふ神の有効なる働きは吾人の二重性ある個性に於て生命を吾人に回復し得る如き種類のものでなければならぬ。如何に罪を赦しても新生命を與へることが出來ぬやうでは無益である。神は如何にして新生命を吾人に與へ給ふたか。

啻に生命は生命からのみ來るといふのが普遍的の法則であるのみならず、又新生命は兩親の生命の死を通ふしてのみ來ると云ふのが一般原則である。凡ての動植物細胞は新しき原子細胞を產み出すと共に自らは死し、凡ての動植物も新しき組織に生命を賦與すると共に、其送り出した新組織內の生命のエネルギー丈け自分が死ぬものである。故に神は死せる人類にまで新しき生命を賦與するには等しく死を通ふして之を成し給ふたのである。神は基督に於て全世界の古今の人間の生命を回復するに必要なる程度にまで自ら苦しみ自ら死に給ふた。即ち神は人が生きる爲めに自ら死したのである。基督敎會は兎角に十字架上の主キリストの慘憺たる苦痛を以て神人和解の全行爲を意味するものと考へる傾向を有してをるが、併し予に取つては其の如き意見は餘り

に淺薄であつて、此場合の要求に充分應ずることが出來ぬと考へられるのである。神は此宇宙に於て徐々に働き給ふ。千年は彼れに於て猶ほ一日の如くである。天文學、地質學、生物學、社會學、心理學、倫理學の方面に於て神は各時代を經て種々なる階級及び種類の存在物を造り之を發達進化せしめ給ふたのである。其の如く吾人は神が吾人の救拯の爲めに一個の犧牲を供し給ふために永き時間を用ゐ給ふたと想像するは當然ではあるまいか。科學も天啓も共にかくの如き想像の正當であることを立證してをる。ペテロはキリストが『世の基を置かざりし前より豫じめ定められたる所に從ひて』犧牲の事業を成就せられたことを語り、ヨハネは其默示錄に於て『羔は世の始めより屠られたり』と云つてをる。加之、聖書の中には人間の最初の罪から此の方基督が吾人の救ひの爲めに世界に於て常に働き給ひ、而して信仰と悔改との條件の下に壓落せる人間にまで常に生命を賦與しつゝあつたことが諸處に書き誌されてある。偖て若しも基督が世の創始より屠られてあつたならば、且つ若しも彼は常に大犧牲の成就の爲めに吾人を救ふべく其力を竭しつゝあつたとするならば、彼は慥かに最初から常に

患難苦痛を受け、其極點が終に十字架の慘劇となつて現はれたものであると云ふべきである。

生命の法則に從へば死の主要なる原因の一つは、動的行爲によつて來る勢力の消耗が其生物の潛勢力によつて充分に補はれない事である。之は殊に生命の繁殖作用に於て潛勢力が新生命の方に費され過ぎる所から餘りに多くの過勞が生物體の上に生ずる場合に著しく現はれる事實である。斯くの如く若しもキリストの吾人のためにせる犧牲の事業が實際彼れ自身の生命を吾人の爲めに與へる事であり、而して若しも其犧牲の事業が受肉降誕以前に幾分にても人類に生命を與へることに有効であつたとするならば、然らばキリストの苦痛と死とは彼れの地上の事業が始まる前から既に始つて居り、全時代を通じて吾人に生命を賦與する爲めに常に彼れ自身の生命を與へ彼れ自身の榮光を失ひつゝあり給ふたことが明かである。此の犧牲の絕頂が即ちキリストの受肉化身であり、其苦がき杯の最後の一滴が十字架である。かくて救主は世界の始まりし以前より共に有し給へる榮光と滿ち足れる生命とを棄てゝ新生命を吾人々類に與へ

給ふた。而して是れは破られたる律法の趣旨を滿足せしめる爲めと云ふよりは、寧ろ主の福音によつて生命と永生との道を人類に示し、彼等をして全き救にあづからしめんが爲めであつた。

基督は人類の爲めに死んだ、併しながら彼れは死によりて支配せらるべきものではなかつた。彼は今尙ほ生きてゐたまふ。苦痛の杯が飲み干された時に、彼は生命と死との位地を顚倒し其勢力を一變し給ふた、即ち今や死は全く生に打勝たれ『死よ爾の針は何處にありや、冥府よ爾の門は何處にありや』と云ふ勝利の叫びが凡ての救はれし人の子の口より出づるやうになつた。死せるキリストは墓より復活したまふた。かく聖化されたる榮光の姿に於て墓より復活すると共に、キリストは自らと共に全人類の大家族を死の支配より救ひ出して或新しき榮光の位地にまで回復せしめ給ふた。

乍併、吾等人類の爲に受け給ふた基督の患難は未だ完結しては居らぬ。地上に於ける最後の一人の靈魂が永劫の未來に於て神より來る新しき生命を受けて、人類救拯の全事業が終りを告げるに至る時、初めて基督の人類の爲めにする苦痛は已むのである。

聖靈は今尚ほ言ひ難きの哭きを以て吾等の爲めに和解の祈りをなしつゝある。聖靈は凡ての人にまで惜む所なく自由に生命を與へた。去り乍ら悲しむべき事には或人々は斯くも高貴なる價ひを以て生命を與へ給ふ神の愛を拒絶して、自分の上に『第二の死』を招くのである。此の第二の死は初めに罪が世に入りし時人間が受けた死に比べて見れば更に恐ろしきものである。犧牲の事業は吾人の如何に拘らず吾人の爲めに成就された。乍併先きに明かに示した通り吾人が此新生命を受ける事の方法は自然に新生の手續きを經るにあるのである。即ち此の新生命は人間の靈魂の中に聖靈によつて生れた所の靈的生命である。斯くの如き新生は生命の法則によれば唯だ活動と反動とによつて成るのである。活動はキリストから出で反動は吾人から出る。生命の流れは入らんとして吾人の心の戸を叩きつゝある。若しも心の戸が閉ぢられてあれば、其人は基督が與へんとし給ふ所の生命を何時までも有することが出來ぬ。之に反して若しも心の戸が開けてをるならば、キリストは入り來り而して新生命が生れるのである。

大犧牲を準備し給へる神の事業は、永き時間を必要とする所の事業である。その如

く靈魂の中に新しき胚種の生命を生む事も亦た、幼稚の狀態より成熟の狀態にまで至る所の進歩に於て永き時間を要するのである。胚種の生命は地上の生活の時期內に於て完成せられた。併しながら完然なる生命とは完成せられた肉體の生活を意味するのではない。それは死すべき體を死すべからざる靈的存在の位地にまで向上せしめ、終に死は全く勝利によつて呑まれてしまう時にまで及ぶのである。

第五、キリストの親政。心靈的創造の第四時代の次ぎにキリストの親政至福時代が來るのである。前の時代に於てキリストは信仰ある人間をして神の子たる高き位地にまで向上せしめた。今や彼は再び世に來り特別なる力を現はして人類の中に彼れの王國を建設する。聖書が此の王國の支配及びキリストの再來に關して語る所によれば、それは彼れが自ら地上に降り來りて親しく此世を支配するの時代であるやうに見へる。此の時代の到來は惡魔の勢力が挫かれ人間の上に大なる靈力が與へられることによつて知られるのである。此時に於ける死者の復活に關して聖書に記せる所は次の如くである。『我が多くの座位を見しに其上に坐する者あり、彼等審判の權を與へらる。

又イエスの證及び神の道の爲に首斬られたる者の靈魂を見たり、此は獸と其像を拜せず其印誌を額或は手に受けざりし者の靈魂なり、皆生きてキリストと共に千年の間王となれり』(默示錄二十〇四―五)。即ち此等の人々は一千年の間キリストと共に生きて其王國の支配をなすのである。爰に一千年とあるは正確に千年の間を意味すると解釋する必要はなく、唯だ非常に長き時代の間を意味するのであると見るべきであらう。勿論此の默示錄にある千年間の親政時代は將來に屬するのであつて、之に關して古來多くの臆測が發表せられたのであるが、茲には夫等の神學上の議論を研究する餘白がない。唯だ此日に就て預言者イザヤが述べてをる所を以下に記載する、曰く

『末の日にエホバの家の山は諸々の山の頂きに堅く立ち、諸々の嶺よりも高く擧がり、凡ての國は流れの如く之に就かん。多くの民ゆきて相語り曰はん、いざわれらエホバの山にのぼりヤコブの神の家に行かん、神我等に其道を敎へ給はん、我等その道を歩むべしと。そは法律はシオンより出でエホバの言はエルサレムより出づべければ也。エホバは諸々の國の間をさばき多くの民を責めたまはん。斯くてかれら

は其の劍をうちかへて鋤となし、その鎗をうちかへて鎌となし國は國に向ひて劍をあげず、戰鬪の事を再び學ばざるべし』(以賽亞書二〇二―四)

斯くの如くキリストの治世は平和と正義とを以て其特徵としてをる。其時になれば地上の萬國民は今日よりも遙かに高き信仰と智識との狀態に到達するのである。此の心靈的發達の高き狀態は人類に對する神の施設の第五時期を經過して定めて完全に達せられるのである。人間が此等の恩寵の施設によつて自分の幸福を完ふするを得るのは、イエスキリストを通ふして來る神の慈愛を信じて之を我ものとするに因るのである。ともかくも此等の永き時代の間キリストは親しく此世を支配するのであつて、聖書には之を千年の至福時代(ミレンニアル、レーン)と稱するのである。

第六、新天新地。キリストの親政によれる千年至福時代の後ちに心靈的創造の第六日即ち最後の時代が來るのである。此時代の序幕に於てキリストは王座に坐し其前に審判の爲めに萬國民を集める。海も山も其墓より死せる者を送り出し、各人は其前に開かれたる記錄によつて一々審判を受けるのである。『生命の書』に其名が記してない

人々は其時『火の湖』にまで投げ出されるであらう。

人間の心靈的存在の第六日に達するには、各時代を經過し各創造の順序を經て、初めは物質上の變化を生じ次第に心靈上の新生命が發達し來るやうになつたのであつて、實に容易ならざる手續きを經てをるのである。故に若しも此の人間の爲めに費やされたる凡てのエネルギーと驚くべき愛とに拘らず、依然として自己の創造主たる神の前に立つことが出來ぬ程墮落して居るとするならば、最早や彼等は永遠に神の御前より離れ去るの外はないのである。

乍併、吾人は人間の暗黑面より眼を轉じて、新天新地に適合せるものと認められたる人々の靈的性質と榮光の狀態とを考へねばならぬ。キリストの榮光ある復活に傚へる人間の復活に於て、舊世界の凡ての古き狀態と吾人を害し吾人を苦しめる凡ての事物は悉く過ぎ去つて、そこにイエス、キリストが光明であり榮光である所の新しくして美はしき一都市が實現される。此都市を名けて『新しきエルサレム』と云ふのである。

罪深くして死すべきものであつた吾人は、今や新天新地の仲間入りをなし得る所の

罪なくして不滅なる存在者となつた。此外吾人の爲めに如何なる神の恩寵が貯へられてあるかは吾人の知り得る所でない。唯だ確かに知り得る所の一事は、永遠を貫きて吾人はイエスと共にあり而してイエスの如き者となり得ると云ふ事である。如何なる美はしき言語と雖も、使徒ヨハネが此榮光の都市と其中に住むべき救はれたる人間の狀態について形容してをる左の語に及ぶものはあるまい。曰く、

『われ新しき天と新しき地を見たり、先の天と先の地は既に過ぎ去り海も亦有ることなし。われ聖き城なる新しきエルサレム備へ整ひ神の所を出でゝ天より降るを見る、その狀は新婦その新郎を迎へん爲に修飾りたるが如し。われ大なる聲の天より出づると聞けり、云く神の幕屋人の間にあり、神、人と共に住み人、神の民となり神又人と共に在まして其神となし給ふなり。神かれらの目の涙を悉く拭ひとり、復た死あらず、哀み哭き痛みあることなし、そは前の事すでに過ぎ去ればなり』。(默示錄二十一〇一—四)

『又街に日月の照らすことを需めず、そは神の榮光之を照らし且つ羔、城の月燈

なれば也。萬の國の民この光によりて行まん、地の諸王己れの榮と尊貴とを以て此城に來らん。……凡て潔からざる者と憎むべき行ひをなす者、或は謊をいふ者は必ず此處に入ることを得ず、唯羔の生命の書に錄されたる者のみ入るなり』。（默示錄二十一〇二三―二七）

宇宙的創造の最後の一日たる此時代の記述を終ると共に吾人の著述も亦た其局を結ばんとしてをる。併しながら自然と天啓との兩界に一神を發見せんとする努力に於て多年の幾月を費した後ちに、今や此研究の結果たる著述の筆を擱かんとするに際し、吾人は我が勞力の充分に報ひられたことを感じて之を告白するを禁ずることが出來ぬ。自然は吾人にまで神の言葉の意味を解釋することによつて吾人を神に導いて呉れた。而して自然が創造の循環圓周を完成することの出來なかつた所は、神の言葉たる天啓が吾人の爲めに之を爲して呉れた。かくて天地創造の全圓周は吾人の眼前に明白に描き出され、最早や何人も之に對して疑ひを挾む者なからうと思はれるのである。

創世記は世界に於ける最古の文學の一つである。此書は人間が未だ如何なる科學を

も知ること極めて少き時代に於て書かれたものである。而して今日吾人が地質學の智識によつて地球の歷史と其處に生物の發生する以前に經過した幾多の時代に關して知る所は創世記の著者の毫も關知せぬ所であつた。然るに諸岩石に記錄されてをる地球創造の順序や、過去及び現在に於ける諸の生物の狀態やを、創世記の最初の數頁の記事と對照比較して見るならば、兩者が同一問題に就て語る凡ての場合に於て、彼等は全然相符合するのみならず、又相互に其言を慥かめつゝあるの驚くべき事實を發見するのである。げに其處には唯一つの齟齬さへない。今日の科學の智識を有してをる如何なる人と雖も、恐らく聖書の記事の如く正確に又簡潔に天地創造の物語を記述することの出來る者はあるまい。果して然らば聖書の著者は抑も何處から此の驚くべき智識を得たのである乎。それは學問によつて得たのでない。然らば神話から之を得た乎。否な〳〵神話は決して眞實なるものでない。然らば口碑傳說によつて之を得た乎。或人は左樣に考へるであらう。アブラハムの出でた古代の人民間には幾分か聖書の物語と類似してをる物語はあるが、併し能く比べて見れば到底比較にはならない。併し今假

りに全く同一なる物語がモーセの創世記を書く數千年前に既に存在したといふ事實が見出されたとしても、尙ほ且つ『初めてそれを書いた人が何處から其記事の內容を得たか』と云ふ問題が依然として殘るのである。創世記の創造物語は殆ど全部人間が造られる數千年以前に起つた出來事を語つてをるのであるが、然かも著者は恰も自分が凡ての事を目擊したかと思はれるほど眞實に且つ明確に此等の事を記述してをる。原始時代の人間がかくも驚くべき眞理を捕へるには心靈的の默示の外に何等の方法もなからうと思ふ。或は夢の中に或は幻の中に或は天の使のお告げによつて、若くは直接なる神の默示によつて其心に知らせられたのであらうが、其の如何なる形態に於て來たのであるとしても、要するに神より來る心靈の力及び智識の結果であるに相違ないのである。

恰も長き進化の時代を通じて地質學上の岩層が形造られたと等しく、人間の心靈的創造に於ても地球の堅固なる花崗石にも劣らざる程確乎不動なる岩石の層が存在するを見るのである。此の各層は全然他の層と性質を異にするものであつて、吾人が高き

層より低き層に向つて堀り下る時に各層が整然として互に區別せられてをることを見出すであらう。而して吾人は此等の永久なる岩石の各層に於てエホバの神が各時代に亘り天地の創造と人類の完成との爲めに働き給ふた其の目的と智慧とを判然と認めることが出來る。神の經綸と攝理は心靈界の岩層に歷々として刻まれてをる。

宇宙間の如何なるものも此等の靈界の岩と十字架との關係にまさつて驚くべきものはない。讀者諸君は十字架を以て單にカルバリー丘上の土中に僅か數尺の深さに建てられたものと考へたであらうが、事實は決して其の樣なものではない。今左に少しく之を說明しやう。

第一にして最古なる岩即ち樂園保有の時代の岩に於ては、何等の罪惡從つて十字架の痕跡がない。第二日即ち失樂園の時代の岩には墮落と死とを示す所の化石の痕跡が殘つてをる。併しながら此處には又他の或物の跡も殘つてをる。此岩層の最も低き部分の一凹處に十字架の影に似たる一化石が永き時代の間葬られてあつた。それは即ち『又われ汝と婦の間及び汝の苗裔と婦の苗裔の間に怨恨を置かん、彼は汝の頭を碎

き汝は彼れの踵を碎かん』と云ふ神の約束である。此同じ岩層の上部に於て吾人は今一つの十字架の化石を見出す、即ちエホバの神がアベルの献物を受けてカインの献物を斥け給ふた事を表す所の化石である。而して同じ層の處に上部に當つて更に一層意味深き化石がある、それは即ちノアが方舟から出でた時に捧げてエホバの神に嘉納せられた所の燔祭の献物を意味するのである。斯くてアブラハムの時より、別けてもモーセの時より此方、此等の化石は次第に數多く且つ明かになつて來て彼の契約時代の岩層を飾つてをる。

斯くの如く十字架は幾多の岩層を通じて次第に上部に向つて高く立ち且つ其影の及ぶ所を擴張し行き、遂にカルバリー丘上主イエスキリストの十字架となつたのである。十字架は餘りに第三層岩の表面以上には突出して居らぬが、併しながら吾人は一たび之を負ひ給ふたキリストが墓より出でゝ第四層の岩上に屹立し給ふを見、更に又其岩上の十字架の上に活ける靈活のキリストが嶄然として立ち給ふを見るのである。然り、キリストは勝ち給ふた、彼れ曰給ふ『此磐の上に我わが教會を建てん』と。パウロも

亦曰く『そは置き給ひし基礎の外に誰も基礎をすうる事能はざれば也、この基礎は即ちイエスキリスト也』と。基督は新契約の時代にまで凡ての場合に居給はぬことはない。キリストは世の光である。物質界の創造の第四日の初めに於て、大なる光を有する太陽が地上を照らす爲めに天に掲げられた、而して心靈界の創造の第四日の初めに當つてキリストは即ち靈界の大光明として高く掲げられ給ふた。

今日基督の恩寵によりて萬國民は彼等が曾つてあつたよりは遙かに高き領域に於て生活しつゝある。彼れの子供たる吾人は『時の砂上に足跡を印し』つゝ前途に向つて進歩しつゝあるが、此の足跡ある砂は將來に於てやがて堅固なる岩石となるのであり、而して後世に於て或心靈界の考古學者は永く埋沒せられたる此等の時代の岩石を發掘して吾人が今印しつゝある所の足跡を見出すであらう。第五日即ち基督親政時代の岩石に於ても亦基督は其中心人物であるは勿論である。彼は萬國民の王者であり萬民は其前に跪きて彼れに奉仕する。而して第六日即ち新天新地の時代に於ては、イエスは聖き都の新エルサレム城の光である。十字架は人間の要求の存する限りの深き處に於

て、靈界の岩石の下層に其土臺を据えて建てられてある。而して此十字架の絶頂に立ち給ふたキリストは人間の希望と向上心の到達し得る最高點の上にまで昇り給ふた。人類の靈的進化の凡ての時代に於ける磐石の基礎は、如何にしても崩るゝことはない。よし時として地震の爲めに龜裂を生ずることがあつても、そは決して離れ〴〵になり又は全く崩壞して、人類として其立場を失はしめる樣な事はない。何となれば此等の靈界の岩石は基督と其十字架によつて堅固に結び付けられてあるからである。爰に人は神に於て初めて完きを得、而して神は宇宙に於ける總ての總てゞである。

宇宙の統一　終

文學博士 波多野精一著
スピノザ研究　定價八十錢　郵稅七錢

基督教之起原　定價八十錢　郵稅九錢

文學博士 大西祝著
西洋哲學史（上）　定價壹圓六十錢　郵稅十二錢
西洋哲學史（下）　定價貳十二錢　郵稅四錢

元四作之進 高橋正熊 共譯
アリストテレス 倫理學　定價壹圓六十錢　郵稅十二錢

明治四十五年六月廿七日印刷
明治四十五年六月廿八日發行

定價金壹圓

譯者　加藤直士
發行者　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地　福永文之助
印刷者　樋爪市本田町五丁目八十七番地　村岡平吉
印刷所　樋爪市山下町八十一番地　福音印刷合資會社
發行所　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地　警醒社書店（振替貯金五五三　電話新橋一五八七）
大賣捌所　東京市本郷區湯木町二丁目廿三番地　警醒社支店

青山學院神學校教授
ドクトル、オブ、デビニチイ　高木壬太郎著

基督教大辭典　全壹册

附錄　基督教會年表

四六倍判壹千六百頁　背革クロス　天金箱入　厚二寸五分
六號活字三段組　説明事項三千百有餘　挿圖百四十三個

定價　拾五圓　小包料　卅貳錢

本辭典は、基督教百科全書にして、基督教に關する一切の事項を收め、基督教に間接に交渉ある、文學、政治、哲學、科學、法律、鄕土、美術上の事項をも、網羅せるが故に、一册子を以て、

聖書辭典、聖書總論、聖書神學、組織神學、聖書歷史、聖書古物學、教會史、西洋哲學史、西洋文學史、傳道史、宗教家傳記、哲學者傳記、科學者傳記、詩人傳記、教義史、日本現代教會史教會等を蒐めたるに均しき實質を有す。

本書だにあらば精神界、思想界の消息は掌を指す如し

352
505

332
305

052788-000-9

332-305

宇宙の統一

ジョーゼフ・コーサンド／著

M45

CAA-0001